舵を切る

～四賢婦人・矢嶋楫子の生涯～

文＝福永無想

第十九回「花、散る…」

開け放った宿の窓から、サクラの花吹雪が舞い込む。楫子は手の平で花びらを受けると、咲ききった後も美しいサクラの命を思う。

「矢嶋さま、電報です」

宿の者がそれを差し出す。

（ミセス・ツルーキトク

タダチニオカエリヲコウ）

「ばかな、あの方が死ぬなどあってなるものか」

リウマチを患い、横浜で静養していた楫子の元に届いたその一報は、にわかに信じられるものではなかった。

ミセス・ツルーと初めて会ったのは18年前。聖書も知らず、英語とて話せない自分を彼女は学校の責任者として受け入れ、以来、そばにいて歩む道筋を立ててくれた人であった。喫煙が原因で寮でぼやを出した時、涙ながらに謝った楫子にミセス・ツルーも涙を浮かべ、「注意しなかった私も悪かった」と言ったあの温顔が浮かぶ。

倒れる数カ月前のこと。ミセス・ツルーは女子学院の経営から離れ、角筈（つのはず）（新宿）の三千坪の土地に養生園を設立するため力を尽くしていた。ミセス・ツルーにとって養生園の設立は悲願であった。家のために身をささげ、疲れもいとわず病後産後の休養もろくにとらない日本女性の短命さを案じ、心身の静養ができる施設が必要だと考えたのだ。

疲労がたたったのだ。だが楫子は、自分より若いミセス・ツルーだから静養すれば治ると信じていた。だから横浜での転地療養にも出掛けたのだ。彼女が倒れてから女子学院では、夜の祈りの時間に教師や生徒たちが回復を祈り続けていたという。楫子も駅へと向かう人力車の中で、汽車に乗ってからもずっと祈り続けた。

すっかり痩せ衰えたミセス・ツルーは、自分が建てた養生園の一室のベッドで、楫子を待っていた。ドアが開いて楫子が駆け寄ると、力を振り絞るようにミセス・ツルーは言った。

「矢嶋先生。体の具合はいかがですか…」

死の間際にあっても彼女は、楫子のことを案じた。温もりを失いつつあるその手を握りしめ、楫子は思いを込めて力づける。

「あなたなくして、私はありませんからね」

それが精一杯だった。楫子にとってミセス・ツルーは憧れであり、誇りであり、尊い人だった。楫子が到着してまもなく、ミセス・ツルーはそっと息を引き取った。明治29（1896）年4月18日、彼女は天に召された。異国の地にわたって20年余り、日本女性の地位向上に尽くした55年の人生だった。

■

明治37（1904）年、日露戦争が勃発する。明治維新から40年足らずで、朝鮮半島と満州の権益を巡り日本は大国に戦いを挑んだのだった。10年前の日清戦争の疲弊は残っていたが、新聞がロシアを敵意してあおると、国民もまた熱狂していった。楫子たち矯風会（きょうふうかい）も、戦地に赴いた将兵たちに慰問袋を送ることにした。会には早くから軍人課なるものが設置されており、軍人たちにキリストの教えを説き、禁酒を勧める運動を展開していたのだった。

「慰問袋の中に聖書を入れましょう。将兵の方たちの心の支えになるでしょう」

針や糸、はがき、手帳、ばんそうこう、梅干しなども詰め、女子学院の教師や生徒らを動員してこしらえた慰問袋は6万個にものぼり、陸軍恤兵部（じゅっぺいぶ）に送られた。多くの犠牲者を出した日露戦争は翌年には終結。日本軍は勝利した。

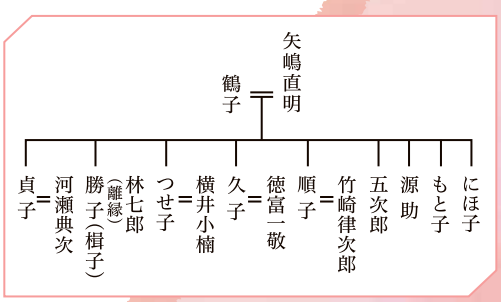
終戦からしばらくして、楫子の元に教え子の大川スギ子が訪ねてきた。スギ子の兄は、激戦地だった旅順の203高地で戦死したという。

「矯風会の慰問袋は、亡くなった兄や兵隊さんたちの心を癒やしたことでしょう。けれど、与謝野晶子が戦争の悲惨さを訴えたように、矢嶋先生には聖書の教えにある『戦争は罪だ』ということをお叫びになっていただきたかった」

慰問袋を送ったのは戦地の将兵をおもんぱかってのことだったが、戦争の熱に加担した、と言われれば言葉もない。スギ子の言葉が楫子の胸に突き刺さる。楫子は思った。齢七十を過ぎた老齢の身だが、世の平和のためにまだ自分にできることがあるのではないかと。そしてまた、楫子は動き出したのだった。

※この物語は、矢嶋楫子の資料をもとに描いたフィクションです

※参考文献＝「矢嶋楫子伝」（徳富蘇峰・監修、久布白落実・著/不二屋書房）、「矢嶋楫子の生涯と時代の流れ」（斉藤省三・著/熊日新書）、「熊本のハンサムウーマン」（堤克彦・著/熊本出版文化会館）、「矢嶋楫子伝 われ弱ければ」（三浦綾子・著/小学館文庫）、「明治女性史」（村上信彦・著/理論社）、「まんが四賢婦人物語」（益城町）



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250　電話/286-4959
開館/9時30分～16時30分　休館/月曜（祝日の場合は翌日）
入館料/一般・高校生200円（160円）、小中学生100円（80円）
※（　）は30人以上の団体割引料金